祇園南海の壮年時代

杉下　元明

一

平成二十三年秋、和歌山市立博物館で特別展「祇園南海とその時代」が企画された。昭和六十一年に和歌山県立博物館で「祇園南海」展がおこなわれたことがあったけれども、四半世紀ぶりの本格的な南海展ということになる。祇園南海は江戸時代中期の代表的な詩人・画家・書家であるが、今回はじめて目にする資料も多く、特に後半生の、紀州での生涯をものがたる貴重な資料が種々展示されていたのが印象的であった。

今回、壮年期（三十代後半以降。年号でいえば正徳・享保期）の南海について執筆したいと考えたのは、こうして和歌山市立博物館で特別展がおこなわれたことが大きな理由ながら、そのほかにもうひとつ理由がある。

かつて日野龍夫は『江戸詩人選集３／服部南郭　祇園南海』（平成三年、東京、岩波書店、三六八頁）の解説で、次のように書いたことがある。

南海の頃の詩集は、詩体別に分類し、それぞれの分類の中は成立順に詩を配列するのが普通であるが、『南海先生文

集』は詩の配列が乱れている。諸方から作品を収集して編んだという経緯によるものか。前述のように南海の詩風は青年時とそれ以後では変化があるが、すべての詩がどちらかの傾向を顕著に示しているというものではないので、成立時期の判然としない詩が少なくない。これが南海の詩の研究の障害となっている。

これに対して拙稿「祇園南海の詩作と推敲」[1]は、板本『南海先生文集』（以下、『文集』と略す）および活字本『南海先生後集』（以下、『後集』と略す）におさめる詩の多くは、それぞれの詩体ごとに制作順に配列されており、多数の詩について制作時期を推定できることを明らかにした。本稿の執筆を思いたった所以である。

延宝四年（一六七六）に生まれた南海の生涯は、正徳元年（一七一一）をはさんで前半生と後半生に分けることができる。

元禄十年（一六九七）に紀伊徳川家につかえた南海は、同十三年に「不行跡」の故をもって城下を追放され、長原村（和歌山県紀の川市貴志川町）で困窮した生活を餘儀なくされた。しかし宝永七年（一七一〇）、藩主吉宗（のちの八代将軍）によって、およそ十年ぶりに許される。翌正徳元年、おそらく新井白石（南海とおなじく木下順庵の門人であった）の斡旋で、南海は江戸へくだった。このとき朝鮮通信使との漢詩の唱酬で名を馳せ、その功績で紀州における地位を復される。その結果、南海は落ちついた後半生をおくることになるのである。

『文集』巻一に「詠孔雀」という詩がある。

孔雀生南越　孔雀　南越に生ず
五采何褆褆　五采何ぞ褆褆たる
十歩一顧影　十歩一たび影を顧み
五歩一顧尾　五歩一たび尾を顧みる

致君玉堂上　君を玉堂の上に致し
恩愛無所比　恩愛比ぶる所無し
珠玉為我籠　珠玉　我が籠と為し
稲粱為我餌　稲粱　我が餌と為す
竦尾為君舞　尾を竦めて君が為に舞ひ
満堂誰不喜　満堂誰か喜ばざらん
奇珍所世疑　奇珍は世の疑ふ所
奇服所人指　奇服は人の指さす所
一朝被讒言　一朝　讒言を被り
恩愛不可恃　恩愛　恃むべからず
毛羽非異初　毛羽は初めと異なるに非ざるに
君意已非始　君意已に始めに非ず
未能従鳳翔　未だ鳳に従って翔る能はず
寧為野田雉　寧ろ野田の雉と為らん

鈴木健一編『鳥獣虫魚の文学史2／鳥の巻』（平成二十三年、東京、三弥井書店）におさめる壬生里巳「祇園南海『詠孔雀』」に、行きとどいた読解がなされているので、内容については詳述しないが、かつて寵愛を受けながら突然それを失った孔雀が詠まれている。

この詩について壬生氏は「『詠孔雀』詩が詠まれたのは、その内容から不行跡によって城下を追われた頃であると考えられている」（二八一頁）と書いている。孔雀の姿に、落魄した南海自身の姿がかさねられていることは、まさしく壬生氏の

指摘どおりにちがいない。

ただ、この詩の制作が「城下を追われた頃」というのは、実は確証が得られない。南海の詩は配列から制作時期を推定することが可能であると先に指摘したが、「詠孔雀」の形式は五言古詩である。『文集』におさめる五言古詩はあまりに数がすくなく、制作年の順に配列されているにしても、制作されたのが正徳以前なのか以後なのかさえ確定することが不可能なのだ。「詠孔雀」が、正徳元年よりもあとに、かつての日々を回想して詠まれたという可能性は、皆無ではない。

二

この正徳元年春、三十六歳となった南海は紀州を出て江戸に向かった。『文集』巻四の十二丁オモテに「辛卯春之東都直川酒店留別諸子」という七言絶句をおさめる。

『文集』巻四十二丁ウラから十三丁ウラに、途中で詠まれた詩がならぶ。それは『文集』の配列では「函関聞子規」「泉南山中」「琵琶湖」「入函関」「望鎌倉」「品河駅」となっているが、「泉南山中」「琵琶湖」「入函関」「函関聞子規」「望鎌倉」「品河駅」の順に制作されたと考えるべきであろう。

「函関聞子規」については「太平詩文」五十四号（平成二十五年五月、東京、太平詩屋）の「函嶺詩選」（三四～三六頁）で触れたことがある。そこでも述べたように、山岸徳平『日本古典文学大系89／五山文学集　江戸漢詩集』（昭和四十一年、東京、岩波書店）が祇園南海の漢詩を五首採録するうち[2]の一首がこの詩である。

武昌城裏昔知君　　武昌城裏　昔　君を知りぬ
函谷山中今復聞　　函谷山中　今復た聞けり
欲向東風問旧怨　　東風に向かひて旧怨を問はんと欲すれば

一声啼入幾重雲　一声啼きて入る　幾重の雲

「武昌」について山岸氏は「『京都』を称した語」（二〇八頁）と注記するけれども、これが誤りであることは「函嶺詩選」に書いた。ただしくは武蔵国の江戸を、呉の都市になぞらえて「武昌」と詠んだのである。

「函関」「函谷」が箱根関をさすことは、いうまでもない（「函」も「箱」も、はこという意味があり、かつ函谷関も箱根も、関所で有名という共通点がある）。このように我が国の地名を中華になぞらえた表現をすることは、この時期の南海らの詩にしばしば見られ、ややくだって荻生徂來（徂徠）門下の詩人たちによっても多用される。

ついでながら、南海の「琵琶湖」は次のような詩である。

琵琶湖上琵琶客　琵琶湖上　琵琶の客
千載知音不可逢　千載の知音　逢ふべからず
煙渚無人明月落　煙渚　人無く　明月落つ
夜風吹入一株松　夜風吹きて一株の松に入る

「琵琶湖」という地名に今日の読者は何の違和感もないであろうが、実は「琵琶湖」もまた、こうして近世の詩人たちによって名づけられた、（函谷や武昌のごとく）漢語風の地名であった。のみならず、その人工的な命名がついに正式な地名として定着をみた例なのである。

『文集』巻四にはつづけて「奉和白石井公春晩見憶韻」六首をおさめる。この旅を経て江戸に到着した南海が、新井白石と再会した折に詠んだ詩であろう。

植谷元「祇南海年譜」[3]にも指摘があるが、『文集』巻二にはまた「正徳辛卯八月十一日、菊潭木公・高天漪・室鳩巣・宅観瀾・服寛斎・平霞洲及余、会白石井使君第、賦呈諸君」と題する五言排律をおさめる。正徳元年八月、木下菊潭・深見玄岱・室鳩巣・三宅観瀾・服部寛斎・土肥霞洲・祇園南海の七人が、新井白石の宅に会したというのである。

この七人はみな、この年十月に朝鮮通信使と詩の贈答をおこなう。したがってこの八月の集いも、それに関連したものであったにちがいない。ちなみに南海が通信使と唱和した詩は『賓館縞紵集』、菊潭の詩は『班荊集』というふうに、「七家唱和集」と総称される七つの詩集に収録され、正徳二年に刊行される。

こうして南海らは通信使と詩の贈答をおこない名声を得ることになるのだが、具体的な経緯については、拙稿「朝鮮の学士李東郭」[4]で触れたこともあるので、本稿では省略しよう。ただ、このとき伊藤佑之という加賀前田家につかえた儒者に知遇を得たこと、佑之と南海は正徳五年に紀州で再会し、その際、別れにおよんで「送伊藤子序」が書かれている（これは植谷氏の「祇南海年譜」にも触れられていない）ことを附記しておく。[5]

三

正徳六年（享保元年・一七一六）、新井白石は六十歳をむかえた。このとし南海は四十一歳。『文集』巻一の十八丁オモテに「新井使君六十華誕、恭製一律以具祝寿、且裁此篇奉贈、併述鄙衷」をおさめる。

また『文集』巻三の九丁には「哭亡友南山南先生」という五首の七言律詩をおさめる。木下順庵門下の儒者で、越中前田家につかえた南部南山をいたんだ詩である。拙稿「越中の儒者南部南山」（「和漢比較文学」四十六号。平成二十三年二月、八七～一〇一頁）でも触れたが、南山の没した年次は正徳二年と三年の二説がある。

その五首目を掲出しよう。

山川鍾秀出崎陽　山川鍾秀　崎陽に出づ
天寿僅多五十強　天寿僅かに多し　五十強
人物非王即是謝　人物は王に非ざれば即ち是れ謝

詩篇超宋独之唐　詩篇は宋を超え独り唐に之く
家蔵遺草非封禅　家は遺草を蔵し封禅に非ず
名附先賢老酔郷　名は先賢に附し酔郷に老ゆ
但慰鳳雛成羽翼　但だ慰む　鳳雛　羽翼を成すを
英風千歳挹流芳　英風千歳　流芳を挹(く)む

第一句の「崎陽」は、長崎。「先生長崎人」と注記がある（なお南山は五十五歳で没した）。第五句は司馬相如が念頭にあろう。相如の死後は著作がのこっておらず、ただ封禅について書いたものだけがのこされていたという（『史記』司馬相如列伝）。ただし後述するように、南山の遺稿は公刊されるにはいたらなかった。第七句は、南山にすぐれた子がおり、そのことが亡くなった南山への慰めとなる、と詠む。南部南山に景春という息子がいたことも後述する。

やや先回りして述べると、巻三の十丁から最終丁（二十三丁）にかけては、次のような詩がならぶ（かりに番号を附す）。

1「遊紀三井山題大悲閣」
2「題紀三井山海龍閣」
3「遊紀三井山」
4「賦酒」
5～10「湘雲居六題」
11・12「哭弟維章」二首
13・14「次明石梁蛻嵓歳暮小集韻寄贈」二首
15「為久野君賦飛梅」
16・17「恭次羽林小倉公賜韻奉酬」二首

18〜27「十雪詩」
28〜32「哭筑州使君白石先生」五首
33「冬夜有憶南山先生思聡」
34「秋日過光明寺送普白和尚」
35・36「賦春夢」二首
37「松蕈」
38〜47「鶯梭詩」
48・49「次韻酬桂山彩嵓先生」二首

このうち38「鶯梭詩」は元文二年（一七三二）作である（引があり、「元文二年二月下浣」とある）。

また28は筑後守新井白石の没した折の詩だから、享保十年作と考えられる。

33「冬夜有憶南山先生思聡」（「思聡」は南山の字）には引があり、「聞く、思聡遺稿、詩八百首有り。死後、人の収拾する無し。余嘗て貲を捐て梓を命ぜんと擬し、諸を白石先生に謀る。以て其の稿を索む。未だ得ずして先生も亦た逝けり。今、其の稿は何処に散落するかを知らず。徒に慨然たるのみ」と書かれている。この詩もまた白石の死後に詠まれたのであろう。ちなみに南山の詩は「喚起漫草」と題して集成されたが、刊行され広く読まれるにはいたらなかった。写本としていくつかの図書館につたわるのみである。

南海と白石・南山には浅からぬ因縁がある。

南海が自ら編んだ『鍾秀集』という詩集がある。南海の友人たちの詩をあつめたアンソロジーであるが、彼はその序文で「予の諸友に於けるや最も景慕する所は南山思聡に如くは莫し、巻首之を冠する所以なり。其の知己たる所は白石源公に如くは莫し。故に次に之を録す」（原漢文）と書き、この二人の詩を第一・第二に置いている。南山と白石は南海にとって、

もっとも大切な友人であった。

二人との因縁はそれだけではない。話は宝永四年（一七〇七）にさかのぼる。

前述したように南部南山には、景春という息子がいた。このとき十三歳の景春は、「東叡山」（「登東天台」とも）や「吉祥閣」などの詩を賦し、天才少年とうたわれた。これらの詩をおさめる写本『東叡山詩』（国立公文書館内閣文庫所蔵）に、白石は「景春が此の詩、雄渾偉麗、唐の盛んなる者なるか。因りて憶ふ昔錦里に学びしの日、南海の祇生年十三四、同学と共に辺馬帰思有りて詩を賦す」（原漢文）云々と書いている。すなわち南山の息子の詩を見て、同じく天才詩人と呼ばれた十数年前の南海を想起したのだ。ちなみにこの宝永四年、南海は三十二歳。紀州にあって謹慎中の身であった。

のみならず同じ宝永四年、白石に「丁亥之春、見南国華吉祥閣詩、忽憶南中祇秀才幼時奇作、悵然恨其貶謫」（『鍾秀集』）という詩もある。次のような詩である。

葛城山上白雲飛　葛城山上　白雲飛ぶ
吹落春風緑薛衣　吹き落とす　春風　緑薛衣
空有江南芳艸路　空しく江南　芳艸の路有り
可憐游子不思帰　憐れむべし　游子　帰るを思はざるを

「葛城山」はここでは、和泉国と紀伊国の境にある、和泉山脈の主峰である。「江南」は紀ノ川の南、すなわち紀州を指す。第四句の「游子」は南海であり、追放処分を受けたままかえることができない彼の身の上に同情したものであろう。

このように南山の子景春は、祇園南海を髣髴とさせる、将来を嘱望された少年であった。しかしその後は幸福なものではない。

話を『文集』巻三にもどそう。33「冬夜有憶南山先生思聡」は次のような詩である。

怪君薄命甚於顔　怪しむ君が薄命　顔よりも甚だしきを

追憶燈前涕泗潸　追憶すれば燈前　涕泗潸たり
蘭玉一時身共槁　蘭玉一時　身共に槁(か)る
萍蓬千里魂何還　萍蓬千里　魂何くに還る
酒杯且寄風塵裏　酒杯且く寄す　風塵の裏
詩巻誰留天地間　詩巻誰か留めん　天地の間
蝉躁蛙鳴空聒耳　蝉は躁ぎ蛙は鳴き空しく耳に聒(かまびす)し
可堪片石望寒山　堪ふべけんや　片石　寒山を望むに

第一句の「顔」は、孔子の高弟顔回。若くして世を去ったことで知られる顔回以上に不幸な、詩は散逸し息子も夭折した南山に同情して詠まれた詩である。

注記がある。書き下して掲出する。

思聡歿後六年間、婦人及び四男相継いで亡す。思聡は本と崎陽の人。後、東都に居し、又た北越に宦す。遂に終はりぬ。

かつて南山の死後、南海は「但だ慰む　鳳雛　羽翼を成すを」と詠んだことがあったが、鳳雛たる南部景春は成鳥となることを得なかったのである。

四

三章で述べたように、『文集』巻三の九丁には正徳の初年に没した南部南山をいたむ詩があり、その二十八首あとには享保十年に没した新井白石を哭する詩があった。配列が年次順であるという私の見方が正しいならば、1「遊紀三井山題大悲閣」から27「十雪詩」まではみな正徳から享保十年にかけて詠まれた作であろうと推定できる。

これらのなかから、まず「題紀三井山海龍閣」を掲出しておこう。(6)

潮撲山門飛閣重　潮は山門を撲ち飛閣重なる
丹梯客過響吟筇　丹梯客は過ぎ吟筇を響かす
亦当海岸孤絶処　亦た海岸孤絶の処に当たる
況是蓬莱第二峰　況や是れ蓬莱第二峰
海献聖燈蔵宝気　海は聖燈を献ず　宝を蔵むる気
山称名草採芝蹤　山は名草を称す　芝を採る蹤
惜乎千歳少題咏　惜しまんや　千歳　題咏の少なきを
酔筆為揮満壁龍　酔筆為に揮ふ　満壁の龍

第四句に注がある。「礼山は凡そ三十三所有り。熊峰を以て第一と為し、此の地を以て第二と為す。蓬莱は熊峰を指す」。すなわち、紀三井寺は現在の和歌山市内にあり、西国三十三箇所第二番札所。一番札所は青岸渡寺である（「熊峰」は、熊野を指す）。

青岸渡寺は古来、補陀落信仰にふかいゆかりがある。補陀落とは元来、仏教の観音菩薩の住む聖地とされ、後述する昌国県をはじめ、仏教信仰のある各地に「補陀落（補陀洛）」を名乗る地がある。我が国では那智も補陀落山に準えられ、いわゆる「補陀落渡海」も中世にしばしばおこなわれた。

次に掲出する「遊紀三井山」では、その補陀落信仰にかかわる表現がみえる。

天下三十三福地　天下三十三福地
此山亦是古霊場　此の山も亦た是れ古霊場
潮音和梵蓮洋濶　潮音　梵に和して蓮洋闊き
林樹起痾花雨香　林樹　痾を起こし花雨香る
昌国一燈伝聖燄　昌国一燈　聖燄を伝へ
翠屏三井譲清涼　翠屏三井　清涼を譲る
威神巍巍金剛窟　威神巍巍たり金剛の窟
幸闡光明秘密蔵　幸ひに闡(ひら)く　光明秘密の蔵

第二句は、一番札所の青岸渡寺がそうであるように、紀三井寺もまた古霊場である、の意味か（この詩はのち享保十五年、ほかの詩とともに「紀三井寺八景詩書」としてまとめられて紀三井寺に奉納されており、[7] 第二句を「此山第二古霊場」とするなどの異同がある）。第三句・第五句については、後述する自注にいうごとく、「蓮洋古渡」などの景がある昌国県補陀洛迦寺（普済寺）に、同じく海に面した紀三井寺を準えた表現。第六句は、天台山の翠屏山（寒山が住んだことでも名高い）に三つの井があるということを踏まえる（「紀三井寺」もまさに三つの井戸があることから、命名されたとされる）。

「遊紀三井寺」の注記を書きくだしておく。

補陀落山は昌国県海中に在り。其の八景中、洛伽燈火・蓮洋古渡有り。○天台翠屏山、三井有り。山は薬樹有り。伝へらくは是れ竜宮より来たると。○往歳、本堂啓龕、衆縁を結ぶと。

この時期の南海は、ほかにも紀州の各地を訪れている。たとえば「切目王子」。

『文集』巻一の十八丁から二十六丁にかけて、次のような七言古詩がならぶ。

「新井使君六十華誕、恭製一律以具祝寿、且裁此篇奉贈、併述鄙衷」

「篆隷歌寄崎陽彭城生」

「寄題切目王子宮」

「富士行」

「悼猫」

「歩紙歌」

「読書懐旧傷先師木公也…」

「己巳歳初作」

「鸚鵡」

「江州僧某、以念仏纔開口、池中結宝蓮、為題請詩及画、聊賦一篇、且写一枝以贈[8]」

このうち「歩紙歌」は「延享丁卯春」と注記がある。すなわち延享四年（一七四七）作である。

「読書懐旧傷先師木公也…」は、引に「寛延元年季冬廿三日」とあり、寛延元年（一七四八）十二月[9]の作であると知られる。

「己巳歳初作」は寛延二年の作。

「新井使君六十華誕…」が享保元年作であることは三章で述べた。したがって配列から判断して、「篆隷歌…」「寄題切目王子宮」「富士行」「悼猫[10]」などの古詩が詠まれたのは、享保元年以降、延享四年以前であろうと推定される。

このうち「寄題切目王子宮」は次のような詩である。

蓬莱之山峙海中　　蓬莱の山　海中に峙つ

六鼇鼉屓潮噬趾
玉府銀台知多少
五雲玲瓏金霞紫
切目神殿第幾宮
不老貝闕何歳起
貝闕窈窕屹双桓
碧磴青蘿水葱寒
療渇梅泉天淵漿
万古宝燈金鵞丹
南山往往金丹穴
伝是群仙所窟盤
紺穹銀月秋如水
芝蓋飈輪駕六鸞
帝子降来山之阿
風颼颼兮佩珊珊
鼉鼓雲璈楽神方
玉醴蕙肴藉芳蘭
憶昔元弘草昧年
豺虎蚶蜑鯨鯢羶

六鼇鼉屓　潮は趾を噬(か)む
玉府銀台　知んぬ多少
五雲玲瓏　金霞紫なり
切目の神殿　第幾宮
不老の貝闕何の歳にか起こる
貝闕窈窕　屹として双桓
碧磴青蘿　水葱寒し
渇を療する梅泉　天淵の漿
万古の宝燈　金鵞丹し
南山往往　金丹の穴
伝へらくは是れ　群仙　窟盤する所と
紺穹銀月　秋　水の如し
芝蓋飈輪　六鸞に駕す
帝子降り来たる　山の阿
風颼颼として佩珊珊
鼉鼓雲璈　神方に楽しむ
玉醴蕙肴　芳蘭を藉く
憶ふ昔　元弘　草昧の年
豺虎蚶蜑として鯨鯢羶し

王家南狩煙塵昏　王家南狩して煙塵昏し
誰知神光照九乾　誰か知らん　神光　九乾を照らすを
宮前夢回太白高　宮前夢回り太白高し
龍飛日月錦旌懸　龍飛んで日月　錦旌懸かる
上皇亦曽駐仙蹕　上皇も亦た曽て仙蹕を駐む
羽従森森星冕芾　羽従森森　星冕芾たり
宸筵歌奏鳳来聴　宸筵歌奏して鳳来聴す
咨嗟天南富風物　咨嗟す　天南　風物に富むを
天南風物天下奇　天南の風物　天下の奇
済勝探討究者誰　済勝探討　究むる者は誰ぞ
孫綽天台空有賦　孫綽　天台　空しく賦有り
馬遷禹穴跡難追　馬遷　禹穴　跡　追ひ難し
欲問仙宮吾老矣　仙宮を問はんと欲するに吾老いたり
極目雲海波一鴟　目を極むれば雲海　波一鴟

「切目王子」は、現在の和歌山県日高郡印南町にある神社。「熊野九十九王子」のひとつである。詩の前半では太平洋に間近いこの神社が、さまざまな形で仙郷にたとえられる。第一句では、海中にあるという蓬莱山に準えられる。第二句「鼇屓」は、大きな亀。第四句「五雲」は、五色の雲。白居易「長恨歌」に「楼閣玲瓏として五雲起こる」とある（「長恨歌」でもまた、仙女たちが住むという楼閣が、海中にあるとされている）。第六句「貝闕」は、『楚辞』九歎「逢紛」に「紫の貝闕にして玉堂」とあり、紫の貝でかざった宮殿。これも、海に近い神社であることから連想されたのであろう。第八句「水

葱」には自注があり、「水葱は樹の名。熊峰に在り」（原漢文）という。熊野に多いナギのことである。[11] 第九句「梅泉」や第十一句「金丹穴」は未詳だが、切目には泉や、仙郷をおもわせる穴があるのであろうか。第十四句「芝蓋」は、張衡「西京賦」（『文選』）に「四鹿を驪ね駕して、芝蓋の九葩あり」とあり、霊芝のきぬがさ、すなわち、きのこのような形をした、車の蓋をいう。

第十五句は、仙郷を描写しているようでもあり、現実に天皇が熊野に参詣したことをうたっているようでもある（第十七句「鼉鼓」は、鼉〈わにの一種〉の皮でつくった太鼓、「雲璈」も楽器の名）。

さらに詩の後半にはいり、歴史上の場面における切目王子の役割が強調される。第十九句「元弘」は鎌倉時代末期の年号。『太平記』巻五によれば、元弘二年（一三三二）、大塔宮護良親王は幕府軍に追われて熊野を落ちてゆき、切目王子で夢のお告げを受けた（『新編日本古典文学全集54』二六三頁）。したがって第二十句は、鎌倉幕府をけだものやくじらにたとえた表現である（「蚶蛟」は、獣が舌を吐く様子）。第二十二句「九乾」は、九天におなじ。第二十五句は、正治二年（一二〇二）十二月三日に後鳥羽院が切目王子で歌会を催したことを指すのであろう（このときの詠草が「熊野懐紙」としてつたわる）。「星冕」は未詳だが、うつくしい冕冠をいうか。

詩は次のようにむすばれる。

紀州の地には天下の奇ともいうべきめずらしい風光が多い。それを探求するものは誰か。孫綽は「遊天台山賦」をのこし、司馬遷は会稽山に禹の遺跡をさぐったというが、自分は年老いて、今はそういった風物を追求することが難しい。

第二十八句「咨嗟」は、ため息をついてなげくこと。「天南」はここでは、南海道にある紀伊国をさすのであろう。第三十句「済勝」は、すぐれた景色をわたりあるくこと。第三十一句「孫綽」は東晋の人で、「遊天台山賦」を書いた。第三十二句「禹穴」は、『史記』太史公自序に「会稽に上り禹穴を探る」とあり、禹の遺跡とされる穴の名。第三十四句「鴟」は、とび。

五

祇園南海にとって正徳から享保にかけては、新井白石・南部南山といった旧友が世を去るという形で退場してゆく時期でもある。その一方で、南海の詩にはあらたに紀州の詩人たちの姿が見えてくる。

南海の詩についてはまた、『南海先生集』（以下、『先生集』と略す）、『南海老先生詩集』などの写本が現存する。[12] これらの写本から、南海の周辺には、奥野鶴渚・木村滄洲・岩橋呉淞・津田柳浪・田中履道といった詩人がつどい、[13]「紀州詩壇」ともいうべきものの成立が窺われることは、拙稿「祇園南海と紀州詩壇」（「国文学／言語と文芸」一二八号。平成二十四年三月、一〇六～一一三頁）で述べたところである。

「祇園南海と紀州詩壇」で触れることのできなかった詩人として、次のような人名が見える。

二村蓉洲。[14]『南紀風雅集』によれば、名は之冕、通称は辨左衛門。安藤家の臣であった。「江上送別用蓉洲韻」（『南海老先生集』）を掲出しよう。

別後相思誰又憐　別後相思ひて誰か又た憐れむ
春衫分袂涙漣漣　春衫　袂を分かち　涙漣漣
送君不及鴛鴦鳥　君を送りて鴛鴦の鳥に及ばず
双客菱菰浅水辺　双客　菱菰　浅水の辺

高井雲濤。『南紀風雅集』によれば、通称は善助。息子の高井子雲とともに学問にすぐれたという。「舟中次雲濤韻」（『先生集』）を掲出する。

南浦軽風雛碧漪　南浦　軽風　雛碧漪

同舟正是蓴鱸時　舟を同じくし正に是れ蓴鱸の時
虹光涼劈緑沈果　虹光　涼は劈く　緑沈果
河影秋深金屈巵　河影　秋は深し　金屈巵
蟋蟀声中回客夢　蟋蟀の声中り客夢を回る
蒹葭露下冷吟思　蒹葭の露下り吟思冷ややかなり
江山応接自無暇　江山応接するも自づから暇無し
莫怪瑶篇欲和遅　怪しむ莫れ　瑶篇　和せんと欲して遅きを

第一句「南浦」は、南の浦、すなわち紀伊国の浦であろう。[15]「雛碧漪」は未詳（「碧漪」は、あおいさざなみ）。第二句は晋の張翰のいわゆる蓴羹鱸膾の故事を踏まえ、秋風の季節であることをいう。第三句「緑沈果」は、濃緑の果実をいうか。第四句「金屈巵」は、取っ手のある金属製の盃（于武陵「勧酒」で知られる）。

長野南郭。貴志康親『紀州郷土／藝術家小伝』[16]によれば、名は祐孝、字は戩、通称は九左衛門。『南海老先生詩集』におさめる「仲秋夜過長南郭宅即事」を掲出しよう。

疎砌雨多苔鮮滋　疎砌　雨多く　苔鮮滋る
秋風旅雁下城池　秋風　旅雁は城池に下る
客来酒醒聴天籟　客来たり酒醒めて天籟を聴く
南郭子綦憑几時　南郭子綦　几に憑る時

「南郭」は詩人の号であるとともに、『荘子』斉物論に「南郭子綦、几に隠りて座し」「子綦曰く（略）汝、地籟を聞きて未だ天籟を聞かざるかな」などとあることを踏まえる（「子綦」は、楚の昭王の庶弟）。「天籟」は、空に鳴る自然の響きをいう。

小林龍浜。『紀州郷土／藝術家小伝』によれば、名は友貞、字は子斎、通称は佐次右衛門。三浦長門守の家臣で、詩書にすぐれた（没年・享年は不明）。「次龍浜韻」（『南海老先生詩集』。「遊山寺走賦」という詩のあとに置かれている）を掲出しよう。

山寺花開塵自稀　山寺　花開き塵自づから稀なり
満枝香雪照人衣　満枝の香雪　人衣を照らす
与君相約再遊日　君と相約す　再遊の日
莫使東風一片飛　東風をして一片も飛ばしむる莫かれ

岩橋雲嶠。『南紀風雅集』によれば、名は里通、通称は吉郎大夫。「次雲嶠韻」（『南海老先生詩集』）を掲出しよう。「海龍閣」で詠まれた詩という。

珠宮三十三名山　珠宮　三十三名山
探討欲窮未得閑　探討　窮めんと欲するも未だ閑を得ず
共掬金剛楊柳水　共に掬ふ　金剛　楊柳の水
再蹉巖磴莓苔斑　再び蹉む　巖磴　莓苔の斑
魚塩膠鬲何人是　魚塩　膠鬲　何人か是なる
橘柚陶朱幾日還　橘柚　陶朱　幾日か還る
最羨為宦百自在　最も羨む　宦と為りて百たび自在なるを
年年蓑笠水雲間　年年　蓑笠　水雲の間

頸聯の「膠鬲」は、殷の人。乱を避け、魚や塩を売って暮らしていた。『孟子』告子に「膠鬲は魚塩の中より挙げらる」（膠鬲は魚や塩などを売っていたところを文王に見いだされた）とある。「陶朱」は、春秋時代の范蠡の別称。越王勾踐の臣

を辞めたあと、莫大な富を蓄えたことで知られる。雲嶠は武士を辞めた経歴でもあったのであろうか。

坂井良宝。『南紀風雅集』によれば、名は周道、姓は橘。敬亭とも号す。南海に師事。天明三年（一七八三）、八十六歳で没。『南海老先生詩集』には「酬良宝見贈」や「次敬亭韻」もおさめるが、「贈良宝橘秀才」を掲出しておく。

看君仙骨本清瘦　看る　君が仙骨　本より清瘦
才気飄飄千里駒　才気飄飄たり　千里の駒
四海当今雲雨遍　四海当今　雲雨遍く
蛟龍未必老江湖　蛟龍未だ必ずしも江湖に老いず

承句はここでは、天下泰平の恩沢が日本中におよんでいることをいう。「蛟龍」は、南海自身を指すか。「江湖」は、川と湖の意と、世間の意を掛けているのであろう。

享保十七年（一七三二）には垣内東皐が亡くなった。延宝八年（一六八〇）生まれ。伊藤仁斎の門人で、紀州藩および豊前中津藩につかえた。[17]『特別展「祇園南海とその時代」』[18]によれば、享保十九年六月に東皐をしのび、次の詩を詠んでいる（これも植谷氏の「祇南海年譜」には触れられていない）。

曽聞才子出皇京　曽て聞く　才子　皇京に出づと
借問幾人尤善鳴　借問す　幾人か尤も善く鳴ると
自是炎洲生翡翠　自づから是れ　炎洲　翡翠を生ず
誰知滄海有鯤鯨　誰か知らん　滄海　鯤鯨有りと
十年旅剣気凌斗　十年　旅剣　気は斗を凌ぎ
一夜詞毫夢吐英　一夜　詞毫　夢は英を吐く
白首相逢緑鬢客　白首相逢ふ　緑鬢の客

文壇空負主盟名　　文壇空しく負ふ　主盟の名

「鯤」は大魚の名。東皐をたとえたものであろう。「緑鬢」は、漆黒のびんづら。一般には女性についていうが、ここでは東皐を指すか。「白首」は、老人。南海をいうのであろう（東皐より四歳年長に過ぎないのだが）。

六

『先生集』『南海老先生詩集』などの写本には、『文集』『後集』におさめない南海の詩が、多数収録されている。それらには、正徳以降に紀州で詠まれた多くの作品がふくまれる。

したがってこれらの詩は、植谷氏の「祇南海年譜」にも紹介されておらず、貴重なものといえる。

たとえば「丁酉之年宮大夫捐館荘、亦尋廃令嗣麟洲過而想之哀而作詩、予亦曽屡陪遊焉、遂次其韻以贈併叙鄙情」という二首の詩がある。享保二年（一七一七）の作である。このとし南海は四十二歳。一首目を掲出しよう。

伊水原頭葛嶺西　　伊水原頭　葛嶺の西
満堂松竹夏猶凄　　満堂の松竹　夏猶ほ凄し
風雲際会想新賜　　風雲際会　新賜を想ひ
山水清暉留旧題　　山水清暉　旧題を留む
紅粉楼前双袖舞　　紅粉楼前　双袖舞ひ
翠楊門外乱鶯啼　　翠楊門外　乱鶯啼く
即今独過曽遊地　　即今独り過ぐ　曽遊の地
一榻白雲秋自低　　一榻の白雲　秋自づから低し

「荘は木清宮、賜はる所の中」「清暉堂有り。蓋し謝康楽、『山水、清暉有り』の句に取る」（原漢文）と自注がある。「謝康楽」は、南北朝時代の詩人謝霊運。彼の「石壁精舎還湖中作」（『文選』）に、「山水含清暉」の句があるのを、別荘の名にしたらしい。第一句「伊水」は未詳だが、「紀伊の川」を中華風に表記したものか。「葛嶺」は和泉・紀伊国境の葛城山である。

あるいは「癸卯初冬会村上氏宅卒賦贈主人」は、同八年作。「甲辰閏四月遊北渓寒玉亭次鶴渚主人韻」は、同九年作。また同十一年には「丙午二月十九日与諸友遊大同寺即興探韻得日字」「丙午夏諸友自東都帰同飲于橘侍中宅卒賦謝主人」「丙午仲秋次鶴渚韻」などの詩が詠まれている。

享保期にはまた、いくつもの書画を南海はものしている。

和歌山県立博物館の祇園南海展図録[19]によれば、享保七年（一七二二）には「詩書屏風」、同十三年には「楽志論屏風」、同十七年には「冬景山水図」が書かれている。これらも「祇南海年譜」に紹介されていないものであり、特に「冬景山水図」は南海の画のなかでも年次の知られる最初期の作品である。

七

享保十二年（一七二七）、南海は五十二歳。当時としては老年といってもよいが、長寿をたもった南海はなお旺盛に活動している。『先生集』に「丁未秋幾望与純師看月」「丁未七月既望紀川泛舟」をおさめる。

後者からは七月十六日、紀ノ川で舟遊びをしたことが知られる。掲出しよう。

扁舟乗月中流横　扁舟　月に乗り　中流横たはる
露濯桂花■大清　露は桂花を濯ひ■大いに清し

蘆荻夜鳴鳧藻渚　蘆荻　夜鳴く　鳧藻渚
芙蓉秋満錦宮城　芙蓉　秋満つ　錦宮城
涔籠香霧山還暗　香霧を涔籠して山還た暗く
倒照水光天更明　水光を倒照して天更に明るし
聞説今霄遊赤壁　聞くならく　今霄　赤壁に遊びしと
洞簫恨我不同声　洞簫恨むらくは我の声を同じくせざるを

第二句「■」は、醮（三本足のなべ）のようにも見えるが、未詳。第五句「涔籠」は、しめった霧がこもる状態をいうか。第七句は元豊五年（一〇八二）の七月十六日、蘇東坡が赤壁にあそび「赤壁賦」をものしたことを念頭に置き、それに「客に洞簫を吹く者有り」とあることを第八句は踏まえる。

同じ年の八月十五夜には、長篇の古詩「丁未中秋与諸子泛明光浦」（『文集』巻一）を詠んでいる。この詩については『江戸詩人選集3』二一二～二二六頁に詳しい訳注がそなわるので本稿では引用しないが、「明光浦」すなわち和歌の浦は、南海たちがしばしばあそんだ地であった。ちなみに『江戸詩人選集3』にも指摘があるとおり、「明光浦」の表記は、『続日本紀』巻九に「弱浜（わかのうら）の名を改めて明光浦（あかのうら）とす」（『新日本古典文学大系13』東京、岩波書店、一五五頁）と書かれていることに由来する。

『特別展「祇園南海とその時代」』には享保十五年四月に書かれた「紀三井寺八景詩書」[20]、同十九年夏に書かれた「適」等が掲載されており、南海の書家としての非凡な一面を知ることができるが、やはり享保年間に書かれた『龍門石詩巻』が個性的な筆跡とあいまって、詩としても書としても印象ぶかい。

享保十八年四月、南海は鉛山を訪れた。現在の白浜町である。このとき「鉛山紀行」が『文集』巻五に収録されていることは植谷氏の「祇南海年譜」にも触れられているが、ここで詠まれた「鉛山七境詩」については触れられていない。

この詩は『文集』等に収録されていないが、のち明治二十六年に『龍門石詩巻』という題で刊行される。七境とは、「銀沙歩」「金液泉」「芝雲岩」「薬王林」「平草原」「龍口巌」「行宮跡」を指す。

さらに『龍門石詩巻』は平成七年に太平書屋から『祇園南海／龍門石詩巻』の名で複製が刊行され、その解説（一二三～三五頁）を私が執筆した。解説に書いたように、「銀沙歩」はいわゆる白良浜、「金液泉」は湯崎温泉、「芝雲岩」は千畳敷にある、海に突き出した岩をいう。「薬王林」は現在、湯崎バス停近くにある薬師堂を指し、「平草原」は白浜を見下ろす標高一三一メートルの草原。千畳敷には龍の口の形をした岩があるので、「龍口巌」はこれであろう。「行宮跡」は白河帝が行幸した地をいい、崎の湯の近くにある「行幸源泉」あたりという。

なかでも興味深いのは「平草原」である。「平草原公園」などの名称により、今日でも一般に通用している地名だが、その命名をおこなったのが祇園南海ということであろう。本稿の第二章で、箱根を「函谷」、武蔵を「武昌」と表現した例や、「琵琶湖」という名称が漢詩表現から生まれたのであろうということを述べた。「平草原」という地名もまた、祇園南海らの漢詩表現から生まれ、定着していった例なのである。

注

（1）「国語国文」七四七号（平成八年十一月、二〇～三三頁）。のち加筆して『江戸漢詩　影響と変容の系譜』（平成十六年、東京、ぺりかん社）第一部第一章（三五～五四頁）。

（2）ちなみにそのうちの一首は「詠懐」という七言律詩である。この詩には「客舎黄昏不耐愁。風吹霜葉入山楼…」とあり、山岸氏は「これは旅行中の詠」と注記する。しかしそうではなく、故郷紀伊をはなれて江戸で生活していたことを「客舎」と表現したのであろう。注1拙稿を参照。

（3）「国華」八一一号。昭和三十四年十月。東京、国華社。三八八～三九二頁。

（4）『江戸漢詩』第一部第四章（九〇～一〇五頁）。初出は森川昭編『近世文学論輯』（平成五年、大阪、和泉書院、三一～四四頁）。

（5）『特別展「祇園南海とその時代」』（平成二十三年、和歌山市立博物館）九二頁参照。

（6）「紀三井山」はすなわち護国院であるが、「海龍閣」は未詳。なお、南海にはまた七言古詩「紀三井寺八景」がある（「明光夜鶴」「琴浦

秋鴻」「玉津月明」「西海帆影」「潮撲山門」「泉噴磴道」「松汀暁靄」「塩舎暮煙」)。このうち「明光夜鶴」「潮撲山門」は『江戸詩人選集3』二二七〜二三二頁に訳注がそなわる。

(7) 『特別展　祇園南海　図録』(昭和六十一年、和歌山県立博物館、五四頁)および注5『特別展「祇園南海とその時代」』五五頁。

(8) 拙稿「写本『鍾秀集』と『南海先生詩稿』」(『汲古』六十一号、平成二十四年六月、東京、汲古書院)において、この「江州僧某…」は「『文集』『後集』に収録されない詩」(二八頁)と書いたが、粗忽な誤りであった。訂正せねばならない。

(9) 厳密には西暦一七四九年二月十七日であるが、便宜上こう表記しておく。

(10) この詩については『江戸詩人選集3』二四一〜二四三頁に訳注がある。ちなみに鈴木健一『日本漢詩への招待』(平成二十五年、東京、東京堂出版)もこの詩を引用し、「世の中には猫好きの人も多く、この詩を授業で取り上げると、けっこう喜ばれます」(一二五頁)と書いている。

(11) ナギ(梛)は、マキ科の常緑高木。いっぽう藻の一種にもナギというものがあり、「水葱」がこれにあたる。南海は「樹名」と書いているから、これを「水葱」と書いたのは南海の誤解である。

(12) 『南海先生集』は国立国会図書館所蔵。これについては注1拙稿を参照。『南海老先生詩集』は個人蔵。「太平詩文」五十五号(平成二十五年七月)に影印を掲載。また、後述する「祇園南海と紀州詩壇」を参照。

(13) 奥野鶴渚は、通称は奥野宇左衛門、名は忠恒。紀伊徳川家につかえた重臣である。木村滄洲もやはり紀伊徳川家の重臣であった。通称は木村七大夫、名は義章。享保年間に「提学」をつとめた。ちなみに南海は享保十二年、「滄洲木君白雪篇」という詩を書いている。岩橋呉淞は、名は忠真、字は元綱。岩井屋佐一と称した。市井の人であったが詩文にすぐれた。寛保年間(一七四一〜四四)に没。津田柳浪は、名は久道、字は彦祥、通称は彦大夫。奥野鶴渚と詩作の友であったという。田中鳳泉は、名は由恭、通称は勘八、字は履道。南海の門人として『南海先生文集』の編集にも当たった。明和七年(一七七〇)、七十六歳で没。

(14) 後述する『紀州郷土／藝術家小伝』によれば、名字は「ふたむら」ではなく「にむら」と読むようだ。

(15) たとえば「送鶴渚祇役于東都」という詩にも「花は飛ぶ南浦の暮／君を送り兼ねて春を送る」とある。なお「南浦」は南の岸辺の意であるが、『楚辞』以来、別れの地として詠まれることが多い。

(16) 昭和五十年、東京、国書刊行会。昭和四年に正編、同九年に続編として公刊されたものを復刻。

(17) 『国書人名辞典1』(平成五年、東京、岩波書店)四三三頁。

(18) 注5『特別展「祇園南海とその時代」』九七頁参照。ちなみにこの図録からは、享保七年に次の詩が詠まれていることも知られる。「一池春水碧羅紋／行尽前渓路未分／休向樵夫問行径／山邨先見杏花雲」。

(19) 注7『特別展　祇園南海　図録』二九・七頁、および注5『特別展「祇園南海とその時代」』九六頁参照。

(20) 注7参照。

【キーワード】
・日本漢文学　・江戸時代　・和歌山県　・十八世紀　・祇園南海